

はじめに

行政改革や行財政改革自体は、古い歴史があつて、明治維新から始まつたとされていますが、国や地方自治体におけるそのときどきの行革の内容やレベルはさまざまで、時代や状況の変化によつては、以前に実施した行革の内容を新たな行革によつて変える、レベルアップするといったことが、幾度も繰り返されてきたものと思います。そういう点では、もうすでに行革をしたから大丈夫とか、当面は行革の必要はないと言えるものではなく、行革は常に進化していくもの、進化させていくべきものであると思つています。

本書は、市町村の行革の手法や財政健全化団体からどう這い上がったのか興味のある方にとっては、あくまでも1つの事例として参考になるものと思ひますが、決して学術書やハウツー本といった類のものではなく、あれこれの行革を進めるにあつた際の障壁をどう乗り越えたのか、苦境に陥つたときにどう考え、どういうことに苦悩し、辿り着いた先がどうだったのかを実務者として書き下ろしたものです。一方、行革をしなければならなくなつた要因にも目を向けていただいて、何がよくなつたのか、判断ミスはどのようにして起こつたのかなど教訓になるものがあると思ひます。

また、泉佐野市といえば、どんなイメージを持たれているか人それぞれ異なると思いますが、多くの方は関西国際空港がある近代的なイメージと大阪中心部から離れた田園風景の広がる素朴なイメージの両方があると思います。さらには、ふるさと納税や国相手の訴訟などで注目を浴びるなど、良くも悪くも突拍子のないことをするようなイメージを持たれている方もおられると思いますが、その土壤となつているのが市の財政状況です。財政健全化団体となる以前から、総務省を訪れた際は、財政状況の悪さから、財政再生団体となつた夕張市（東の横綱）に対して泉佐野市は西の横綱と揶揄されていると聞きました。泉佐野市全体の歴史を語るものではありませんが、行革・財政の歴史が泉佐野市を物語っていますので、その物語を通じて、泉佐野市というまちを知っていただき、何かの変革のヒントになれば幸いです。